

栄養管理 院内外で進化

闘病を栄養面で支える「栄養サポートチーム（NST）」が、各地の大規模病院を中心に設けられるようになって十年以上がたった。着実に成果を挙げて医療関係者らの栄養管理に関する認識も深まり、高度な情報技術（IT）を活用したり、退院した在宅患者の回復支援に参加したりと進化を続け、病院の内外でますます重要な役割を果たすようになってくる。

（中崎裕）

愛知県豊明市の藤田保健衛生大病院。ナースステーションでNSTの医師らが病棟の看護師と、患者の栄養摂取について意見を交わ

識に差があり、十分な対処ができないこともあったという。そこで一〇年からは各診療科に担当者を置き、月に一度勉強会を開いている。初期から関わる専任看護師の谷口めぐみさん（四七）は「以前は、NSTなんて知らないという先生もいて回診も少なかったが、今は栄養管理が当たり前になった」と変化を語る。

有志が在宅対応も

のNSTを率いる東口高志教授（五八）は一九九八年、当時在籍していた三重県内の病院でNSTを立ち上げた。発足一年で平均入院日数が三週間から二週間に短縮したほか、点滴や院内感染、床擦れも大幅に減少したという。

が悪化しないよう目を配る。金沢市では、医療関係者の有志でつくる「金沢在宅NST経口摂取相談会」が、休日に無償で訪問する活動を続けている。

IT活用、患者の状態把握

す。「ビタミンもナトリウムも数値が下がっていますね。栄養剤、飲めていますか？」。医師の三吉彩子さん（三三）が尋ねると、看護師は「飲めなくて吐いちゃってます」。病室で七十代の男性患者の状態を確認すると「味がだめなのかな。冷やしたら飲みやすいかも」と提案し、次の患者が待つ小児病棟へ向かった。

約千四百床を抱える同病院のNSTは、三吉さんら二十人の中心メンバーと、各病棟の担当者をあわせ総

こうした実績が知られるようになり、〇五年以降、三度の診療報酬改定で加算がつき、NSTを組織する施設は全国で約千六百万所まで拡大した。東口教授は「病院での栄養管理は進んでいる。病気になる前と退院後に正しい食事をするのが大切だ」と、在宅時のサポートの重要性を課題としてあげた。

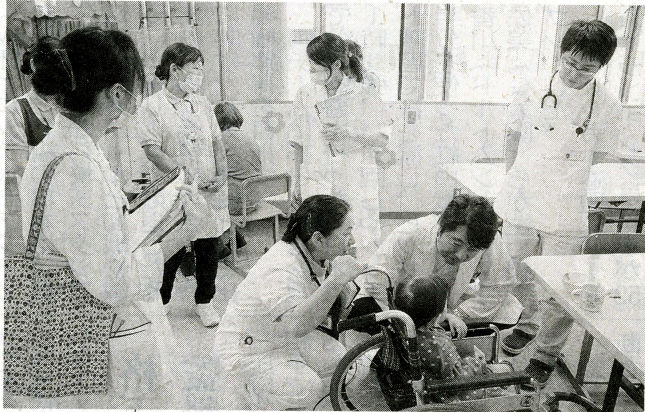
「事業者が別々に訪れて改善点を伝えると患者や家族は混乱してしまう。各職種が一緒に検討することで取り組みに優先順位をつけられ、介護サービスの選択にも役立つ」と代表を務める市内の開業医、小川滋彦さん（五五）。ボランティアでなく診療報酬などがあれば、広がり期待されるが、「職種ごとに事業者が異なることが多いため、チーム内で診療報酬の配分が困難」と課題を指摘する。

今年五月には、全入院患者の血液検査の結果や、必要なカロリーを摂取できているかなどを独自に点数化し、支援の必要性が一目でわかるシステムを導入。電子カルテと連動させ、対象患者一人一人に適した病院食の献立づくりなどに活用している。

同病院でNSTが活動を始めたのは〇四年。当初は栄養管理に関する医師の認

病棟スタッフや患者に話を聞き、助言するNSTのメンバー。愛知県豊明市の藤田保健衛生大病院で

同病院でNSTが活動を始めたのは〇四年。当初は栄養管理に関する医師の認



つなごう 医療

273

中部の

最前線